

令和 元年 6 月 13 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26381272

研究課題名(和文)「新たな学び」への実践的指導力を育成する社会科教員養成カリキュラムの研究

研究課題名(英文) The study on social studies curriculum for fostering the practical teaching abilities for new learning of social studies teachers

研究代表者

伊藤 裕康 (Hiroyasu, ITO)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：70279074

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：教員の大量採用にも関わらず、学校の小規模化や多忙化等により、経験豊富な教員が若い教員に経験知を伝えることが困難となる。高度化・複雑化する諸課題への対応も必要となり、「新たな学び」を支える実践的指導力も求められる。「新たな学び」を指導できる社会科教員養成カリキュラム開発が求められる。「新たな学び」を指導できる社会科教員養成カリキュラム開発を進める際、1)教科教育と教科専門との架橋による社会科教師教育の教育内容の構築、2)社会科教育の視点を踏まえた「特別な教科道徳」における批判的思考力の育成、3)指導に最も苦手と思われる地理的学習の視点からの実践的指導力の育成という3視点に基づき研究を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義や社会的意義に、先の概要の視点1)から、学習者の視点に立つ教科内容の再構築の有効性と講義方法・内容での入力型から出力型への転換の有効性を明らかにし、教科内容学に寄与できる知見を得た点がある。2)から、道徳授業の質的転換に社会科教育の知見が活かせられ、ESDとしての道徳授業構想にもなることを明らかにした。3)から、1)とも係わり、社会科地域学習での教科専門の基本的思考(地域の構造的把握)の有効性を明らかにした。さらに、中学校社会科地理学習の振興策を提言した点である。最後に、学び続ける教員を育成する観点では、大学と連携した地域の教員が集う場の設定が有効であることを明らかにした点である。

研究成果の概要(英文)：In Japan, it is getting harder for expert teachers to impart teaching skills to young teachers because they are busy, etc. Therefore, we need to develop social studies curriculum for fostering the practical teaching abilities for new learning of social studies teachers. To perform this task, we tried to study it based on following three viewpoints. 1) collaborative construction of educational contents by social studies and social science, 2) to foster a critical thinking capacity for "special subject morality" from the viewpoint of social studies and 3) to foster practical leadership of teachers from the viewpoint of geographical learning where teachers are worst at teaching.

研究分野：教科教育学

キーワード：教科専門と教科教育との架橋 社会科と道徳 中学校地理的分野の振興 大学と連携した教員の学び続ける場の設定 実践的指導力 「新たな学び」を支えられる指導力

1. 研究開始当初の背景

養成段階での学びは、被教育経験による憧れとしての教職像と現実的な自己の職業としての教職像から、職業適性を自己省察し教職意思決定を果たす契機となる(小林 2013)。だが、教職志望者の目に留まらない公務分掌等の役割を学ぶには困難がある。教職志望者は、義務教育段階から開始する予期的社会化と教育実習等の疑似体験で、職務内容に一定の役割認識や期待を抱く故、リアリティー・ショックや初期バン・アウトを受けやすい。指導力不足による喪失感、保護者への対応や同僚教員との関わり等からのストレスで精神疾患や早期離職も見られ、新任教員の大量採用が進む教員大量退職時代にも関わらず、学校が小規模化し従来に比べ若い教員の指導に余裕がなくなりつつある。社会や保護者が若い教員の未熟さに不寛容となり、成長を待たなくなってもいる(青木 2013)。さらに、グローバル化や情報化、少子高齢化等社会の急激な変化に伴い、高度化・複雑化する諸課題への対応が必要となり、「新たな学び」を支える実践的指導力も求められる(平成 24 年 8 月の中央教育審議会答申)。「新たな学び」を支える実践的指導力は、「学び続ける教員」こそ修得可能である。中央教育審議会答申では、大学と教育委員会とが連携した教職生活全体を通じた一体的な改革を行い、「学び続ける教員」を支援する仕組みの構築を求めている。今後は、新任者に従来以上に実践的指導力が求められるとともに、それなりに「新たな学び」を支えられる指導力も求められよう。

2. 研究の目的

上述の課題意識に基づき、本研究では「新たな学び」を支えられる指導力を要請する社会科教員養成カリキュラムに係わる、以下の研究課題の解明していくことを目指した。

- ・「新たな学び」への実践的指導力を育成する社会科教員養成と係わる社会科教育の課題を明らかにする。
- ・小学校における地域教材開発力の手立てを明らかにする。
- ・中学校社会科地理学習の課題を明らかにした上で、その課題の解決について提言する。
- ・「新たな学び」に係わる授業を開発した上で、「新たな学び」への実践的指導力を育成する社会科教員養成カリキュラム開発を試みる。

3. 研究の方法

研究開始直後、学習指導要領改訂の動き等があり、それにともない「新たな学び」を指導できる社会科教員養成カリキュラム開発と係わる三つの局面が現出した。それは、道徳の教科化の動き、高等学校地理の必修化と「見方・考え方」による小学校から高等学校までの接続の動き、教員養成における新たな科目「教科内容構成」の設置の動きである。そこで、「新たな学び」を指導できる社会科教員養成カリキュラム開発を進めるに際し、以下の3視点に基づき研究を進めていく。

(1)社会科教育の視点を踏まえ、「考え、議論する道徳」を実現できる教員養成カリキュラムの構築

道徳が教科化されたが、歴史的経緯や道徳の教科の本質から考え、社会科教員が担う役割の大きさが予想される。さらに、従来以上に各教科に道徳との関連が求められている。社会科教員の「新たな学び」への実践的指導力として、道徳教育の観点を批判的に踏まえた指導力が措定されよう。そこで、道徳教育の観点から、「新たな学び」への実践的指導力を育成する社会科教員養成カリキュラムの基底を探りつつ、道徳授業の質的転換における社会科教育の役割を考察していく。

(2)指導に最も苦手と思われる地理的学習の視点からの実践的指導力の育成を図る教員養成カリキュラムの構築

地域学習が主体となる中学年社会科において、教師の指導の困難性がみられる。また、地理的内容が多い小学校社会科5年生の国土・産業学習において、子ども達が学習を嫌う傾向がみられる。一方、中学校社会科では、最も指導が苦手とされるのが地理である。高等学校では、特に地理への指導の困難さが現出しそうである。平成 30 年の学習指導要領改訂により、高等学校に「地理総合」が新設され、地理が必修化した。しかし、地理を専門としない教員が「地理総合」を担当する状況が予想される。困ったことに、高等学校地歴科において、専門外の教員にとって最も指導に困難性を感じるのが文理融合の地理である。地理必修化がかえって地理嫌いな生徒を増やしかねない状況に陥りそうである。さらに、高等学校の地理の充実には、それまでの小学校から中学校までの地理学習の充実も問われる。そこで、地理学習の観点から、「新たな学び」への実践的指導力を育成する社会科教員養成カリキュラムの基底を探りつつ、困難性打破の方途を明らかにしていく。

(3)教科教育と教科専門との架橋による社会科教師教育の構築

学校教育の抱える課題の複雑・多様化する中で、高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた力量ある教員養成が求められる中で、教職大学院が創設された。既存のすべての教育学研究科が教職大学院に移行する動きが見られる。これは、「新たな学び」への実践的指導力を育成することにも係わることである。教職大学院では、教科専門と教科教育の架橋が問題となっている。この問題は、教員養成の学部でも問われるべき問題である。事実、学部教育では、新たに「教科内容構成」の設置が求められている。そこで、教科専門と教科教育の架橋・融合の観点から、「新たな学び」への実践的指導力を育成する社会科教員養成について考察を進めていく。

4. 研究成果

(1)2014 年度

現場教員や社会科教育専攻院生や学部生が参加し、「新たな学び」に繋がるような授業を継続開発する教員の語りを聞く会を設けた。これは、教員のライフヒストリー研究になり得る上に、「新たな学び」を支えられる社会科教員の資質・能力育成にも成り得る試みと予見できた。教科専門と教科教育とを架橋する方途として、緒に就いたばかりの教科内容学に着目し、学習者の視点に立つ教科内容の再構築や、入力型から出力型への講義方法・内容の転換(課題場面設定)が授業構成・展開に有効であることを明らかにした。さらに、社会科地域学習では、教科専門の基本的思考(地域の構造的把握)が授業構成・展開に有効であることを明らかにした。

道徳教育を射程に入れた学びが社会科教員の「新たな学び」に繋がると捉え、「現代社会の諸問題に迫る道徳教育」の在り方を探った。

「新たな学び」に繋がる諸問題の一つとして「水」に着目し、水を基軸とした ESD 授業を構想した。

(2)2015 年度

香川大学教育学部附属坂出中学校を会場に、地域の現場教員、院生や学部生も参加した「学び続ける教員」が集う場の構築を図った。同試みは、卒業後のフォローアップとなり、卒業生へのアフターケアにもなった。

社会科と接続する道徳教育の在り方を「ESD としての道徳教育」の観点から探り、「すでにあるもの」としての捉えから「つくりだすもの」でもあるという捉えへの転換の大切さを明らかにした。

「新たな学び」に繋がる諸問題の一つとして「水」に着目し、水を基軸とした ESD 授業を開発し、水を基軸とすることが ESD 授業を成立させることを明らかにした。

(3)2016 年度

香川大学教育学部附属坂出中学校を会場に、地域の現場教員が集う若手教員の授業検討会を定期的に設定した。同試みは、卒業後のフォローアップと卒業生へのアフターケアにもなるとともに、地域の教育水準を支えるなることが明らかとなった。

PBL に基づき、中国人院生と日本人院生が協働して試みた水を基軸とした ESD 授業開発を、院生達の成長や葛藤・対立に焦点化して考察し、コラボレーションによる授業開発の意義を明らかにした。

教員養成大学における教科専門の在り方を教科専門担当者による教科教育領域との架橋に関する実践史から学ぶため、先達である松井貞雄の講義(社会科教育 A・B)を架橋の実態として取り上げ、その特質と背景を明らかにした。

道徳授業の質的転換に社会科教育の知見が活かせる、それは ESD としての道徳授業を構想していくこととなることを明らかにした。

(4)2017 年度

高等学校での地理必修化を踏まえ、2017 年 11 月に香川大学教育学部附属坂出中学校にて、国土地理院地図の有効活用のワークショップや小学校から高等学校まで参考となる地理授業を公開する会を企画した。県内教員だけでなく、北海道から中国・四国地方の小学校から高等学校の関係教員約 50 名が参加し、学び続ける教員を支援する場となった。

愛知県三河地方の担任教師と教育委員会へのアンケート調査から、小学校社会科副読本の利用状況からみた社会科地域学習の課題を明らかにした。浜松市の中学校社会科教員へのアンケート調査から、地理学習の現状と課題を明らかにした。

現代社会における民主主義社会の形成者育成の立場から、ESD 教材の要件を探った。

道徳の教科化により「考え、議論する道徳」授業の実現が期待されることから、そのための教材の要件を明らかにした。

(5)2018 年度

香川県中学校社会科教員へのアンケート調査と 2017 年度の浜松市での調査結果に 先行研究を踏まえ、中学校社会科地理学習の全国的な現状と課題を明らかにし、その振興策を提言した。

2018 年 6 月の香川大学教育学部附属坂出中学校研究会にて 附属教員との協働で構想した「附坂中版 災害に強いまちづくり計画」を、県内外の教員に公開した。公開授業は、香川県の若い教員の研修資料としてビデオ化された。

5 年間の研究成果を報告書にまとめた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 11 件)

伊藤裕康・鈴木正行(2018)：教師の意識調査からみた中学校社会科地理学習の課題と振興策 香川県及び浜松市における調査から、地理教育研究 23 号, pp.19-28, 査読有

鈴木正行・伊藤裕康(2018)：中学校社会科地理学習の揺れ動きと教師の意識 地誌学習と地域調査学習をめぐって、地理教育研究 21 号, pp.11-19, 査読有

伊藤裕康(2018)：中学校社会科における地歴連携授業の開発・香川大学教育学部研究報告第部 149 号, pp.65-72, 査読無

伊藤裕康(2017)：地理教育の意義に関する考察 - 学校教育における社会的問題解決的有用性

の観点を中心に - . 地理教育研究 20 号, pp. 27-32, 査読有

鈴木正行・伊藤裕康・中村博子・符艶華・饒彩雲(2017): 中国人留学生と日本人学生とのコラボレーションによる授業開発の意義 ESD のための社会科教材「あなたの水は大丈夫?」の開発と実践を通して . 日本教育大学協会研究年報 35, pp. 49-63, 査読有

伊藤貴啓(2017): 愛知県三河地方における小学校社会科副読本の利用状況からみた社会科地域学習の課題. 地理学報告 119 号, pp.83-98, 査読無

伊藤裕康(2016): 水問題を基軸とした持続可能な社会形成のための社会科学習. 教材学研究 第 27 巻, pp. 87-98, 査読有

伊藤裕康・川田英之(2016): 「物語り」を活用した NIESD の構想. 探究第 27 号, pp. 60-67, 査読無

伊藤貴啓(2015): 地理学プロパーからみた社会科教員養成の提言 - 教科専門と教科教育の融合の方途を求めて - . 教科開発学論集第 3 号, pp.61-76, 査読無

植田和也・藤本佳奈(2015)「大学生における規範意識の醸成に関する取り組み~マナー・モラル・ルールについて考える授業を通して~」. 香川大学教育実践総合研究第 30 号, pp.15-27, 査読無

伊藤貴啓(2015): 小学校社会科における地域事象の教材化と教師の力量形成() 地域事象の構造的把握と地理的フィールドワーク技法の分析から - . 愛知教育大学研究報告 64 巻, pp.127-135, 査読無

[学会発表](計 16 件)

伊藤裕康・山城貴彦「大縮尺地図を活用した地域学習の開発とその公開 大学と附属の協働による中学校社会科地理学習の振興に関する一試み」社会系教科教育学会 30 回大会(於, 兵庫教育大学), 2019 年 2 月

伊藤裕康「『見方・考え方』を目的及び方法にし、『意味』を感じられる学習を」全国地理教育学会第 12 回大会(於, 専修大学), 2018 年 11 月

伊藤裕康「生活科と他教科との接続・発展を図る授業の開発に関する研究」第 30 回日本教材学会(於, 福山大学), 2018 年 10 月

鈴木正行・伊藤裕康「中学校社会科地理学習の変容と教師の意識 香川県及び静岡県浜松市における調査を通して」, 全国地理教育学会第 11 回大会(於, 香川大学教育学部), 2017 年 11 月

伊藤裕康「『考え, 議論する道徳』における教材の要件」日本教材学会第 29 回大会(於, 聖徳大学), 2017 年 10 月

伊藤裕康「ESD 教材の要件を探る - 現代社会における民主主義社会の形成者育成の立場から -」日本教材学会中国・四国・九州支部大会(於, 香川大学教育学部), 2017 年 6 月

伊藤裕康「生活科と社会科との接続・発展を図る授業構成に関する研究」日本生活科・総合的学習教育学会(於, 豊島区立池袋第三小学校), 2017 年 6 月

伊藤裕康「地理教育の意義に関する考察」全国地理教育学会第 10 回大会(於, 文京学院大学), 2016 年 11 月

伊藤裕康「ESD の視点を踏まえた道徳授業の教材開発」, 日本教材学会第 28 回大会(於, 盛岡大学), 2016 年 10 月

伊藤裕康「道徳授業の質的転換と社会科教育」, 全国社会科教育学会第 65 回大会・社会系教科教育学会第 28 回大会,(於, 兵庫教育大学), 2016 年 10 月

伊藤裕康「ESD としての道徳授業の構想」, 第 16 回日本道徳性発達実践学会(於, 同志社大学今出川キャンパス), 2016 年 8 月

伊藤裕康「時間軸と空間軸とを連携させた地理歴史科教育法の授業」, 社会系教科教育学会第 27 回大会(於, 鳴門教育大学), 2016 年 2 月

植田和也「附属学校園との連携 学部・附属学校園教員合同研究会の取り組み -」日本教育大学協会研究集会(埼玉大宮ソニックシティ), 2015 年 10 月

伊藤裕康「ESD としての道徳教育」, 第 23 回日本グローバル教育学会全国研究大会(於, 皇學館大学教育学部), 2015 年 8 月

伊藤裕康「水問題を基軸とした ESD の展開」, 日本社会科教育学会第 64 回全国研究大会(於, 静岡大学教育学部), 2014 年 11 月

伊藤裕康「学習者の視点に立つ教科内容の再構築 - 報告者の教職経験から見た教科専門の役割 -」日本教科内容学会第 1 回研究大会(於, 鳴門教育大学), 2014 年 5 月

[図書](計 4 件)

伊藤貴啓(2017): 教員養成における教科専門と教科教育架橋の実践史研究 - 地理学者, 松井貞雄はどのような社会科教員の養成を目指したのか? - . 愛知教育大学大学院共同教科開発学専攻編『教科開発学を創る 第 1 集』愛知教育大学出版会, pp.25-54

植田和也(2017): 「子どものつまずきを生かした授業づくり」. 植田和也・霜川正幸・土田雄一編著『教員としてのホップ・ステップ~磨こう 授業力・学級経営力~』美巧社, pp.64-65

伊藤裕康(2016): 地理と歴史とのバランスのよい学びの必要性を実感させる地理歴史科教育法の授業. 山口幸男・山本實・横山満・山田喜一・寺尾隆雄・松岡路秀・佐藤浩樹・今井英文・中牧崇編『地理教育研究の新展開』古今書院, pp. 264-276

植田和也(2016): 「教育者の道」. 谷本里都子・植田和也・山本木ノ実・田崎伸一郎・高木愛

編著『教員としての はじめの第一歩』美巧社，pp.98-101

〔その他〕

伊藤裕康(2018)：今，日本の地域的特色と環境をどう教えるか - 社会的見方・考え方を鍛える切り口 「だが」の視点から多面的・多角的につなげ，総合的に捉える，教育科学 社会科教育 711号，pp.24-25

伊藤裕康(2018)：生活科の「不易と流行」を考える，学校教育 1209号，pp.44 - 47

伊藤裕康(2017)：「視点」と「問い」でとらえるこれからの地理授業づくり - 地理の見方・考え方を活かして，学ぶ意味が感じられる授業を！ - ，教育科学 社会科教育 700号，pp.4 - 7

伊藤裕康・白山敦史(2017)：時間軸と空間軸で考える！アクティブな地歴連携授業デザイン - 地図と景観写真から歴史的背景を探り，持続可能な社会のあり方を考える，教育科学 社会科教育 701号，pp.118-119

伊藤裕康(2015)：学習形態・手法からとらえる社会科アクティブ・ラーニング 体験学習．社会科教育 680号，pp. 20-21

伊藤裕康(2015)：アクティブな活動の前にしたい学び方ナビゲート 教科書や副読本の使い方．社会科教育 684，pp.22-23

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：伊藤 貴啓

ローマ字氏名：ITO TAKAHIRO

所属研究機関名：愛知教育大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：10223158

研究分担者氏名：植田 和也

ローマ字氏名：UETA KAZUYA

所属研究機関名：香川大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：20709274

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は，研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため，研究の実施や研究成果の公表等については，国の要請等に基づくものではなく，その研究成果に関する見解や責任は，研究者個人に帰属されます。